

# 部活動の効果的マネジメントに関する一考察

1210486 東郷 肖

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 1. 概要

現在、「ブラック部活」という言葉が叫ばれるように、部活動の在り方が問題視されるようになってきた。「ブラック部活」という言葉は、3つの柱に支えられていると言われていた。<sup>[1]</sup>3つの柱というのが、「親」「学校」「教員」である。強くなるには厳しい指導が必要であると考えている「親」、部活動で生徒を管理しようとする「学校」、体罰や暴言は生徒を思ってこそその行動であると信じている「教員」。この3つの柱に支えられて「ブラック部活」が完成されている。

かつて、部活動問題といえば、生徒に焦点をあてて考えられてきたが、昨今では教員もまた、部活動に問題を抱えていることが注目されつつある。これに対して、教育委員会や文部科学省などでは、部活動の過熱化・長時間化等を改善するための対策が講じられているが、解決には至っていない。

そこで、本研究では、現在の部活動が抱える問題を明らかにし、また、教員の残業についての考察も踏まえたうえで部活動がこれからどうあるべきなのかを検討した。その結果、適切な部活動の在り方にするには、現在学校が生徒をコントロールするためのツールとして扱われている部活動を生徒のもとに返す必要がある。そして、生徒が自主的・自発的に取り組む部活動こそが本来あるべき部活動の姿であると考えた。

しかし、部活動は、根強く残る複雑な問題であるため、単に部活動の量を削減することが解決につながるわけではない。教員の多忙化、生徒の需要の多様化、家庭環境の複雑化、部活動への周囲の偏見など様々な問題がかかわりあっている。部活動問題を解決するためには、そのような様々な問題に対してステップ・バイ・ステップの原則<sup>[2]</sup>を用いて少しずつ改善していくことと、一人ひとりの部活動や教員の働き方に対する意識改革が大切である。

## 2. 背景

現在、部活動は教員と生徒の両方を圧迫してきている。日本の労働時間は、1日8時間、残業は1か月100時間までとされている。1か月に残業時間が60時間を超えると、幸

福度が上がり残業麻痺に陥ってしまう。これを「ゾーンに入る」と言う。<sup>[3]</sup>しかし、教員の労働時間はその限度をはるかに超えているケースが多い。つまり、教員の多くは過労死ラインを超えてゾーンに入ってしまった。文部科学省が2016年に行った「教員勤務実態調査」では、約33.4%の小学校教員、約57.7%の中学校教員が過労死ラインを超えていると報告されている。<sup>[4]</sup>その長時間労働の要因の一つとして部活動の顧問が挙げられている。

また、生徒は大会数の増加や部活動が評価の対象となったことから、部活動の過熱化・長時間化したことにより、心身への過度なストレスや負傷・事故の増加に巻き込まれてしまっている。<sup>[5]</sup>過熱化・長時間化することで生徒はストレスを解消できずにバーンアウトになってしまったり、身体の負傷を抱えつつも病院に行けずスポーツ障害を引き起こしたりする可能性が高まる。現在、文部科学省では、週2日の休養、長期休養日の設定、平日は2~3時間で土日は3~4時間が運動部の適切量であると示している。しかし、その適切量は守られていないと言われている。<sup>[6]</sup>過熱化することで一番危惧されることは、体罰・暴言の発生である。現に、指導上での体罰や暴言は強くなるための必要悪という錯覚がまだまだ根強く残っている。体罰は、一発学習と類似した効果を発揮する。一発学習とは、強い刺激により一時的にパフォーマンスが上がることである。一発学習には確かに即効性があり、効果的な指導と捉えられてしまいがちである。しかし、一発学習に永続性はない。<sup>[7]</sup>それどころか、生徒のトラウマとなってしまう恐れがある。教員に怒鳴られないために、教員に叩かれないように、そのような思いで部活動を頑張る生徒を生んではならない。

現在の部活動の過熱化・長時間化に対する心配の声はアスリートの方々からも発信されている。ダルビッシュ有選手は、部活動を頑張る生徒に対して「頑張りすぎないで」と発信した。また、鈴木大地さんは、「主体性があり自ら考えられる人間に育てなければ競技力は上がらない。理不尽に耐える力なんて必要ない」と訴えた。<sup>[8]</sup>部活動によって得たもの

が理不尽に耐える力。確かにそのような力は必要ない。部活動によって生徒に何を不得てほしいのか、どのような力がほしいのか。そこから見えなくなってしまう教員は少なくないのではないだろうか。また、エディー・ジョーンズさんは、日本の部活動に対して「スポーツは楽しむためである。しかし日本では、スポーツは規律を守らせる道具であり、強靱な精神を作るものである」と表現した。<sup>[8]</sup>部活動によって、スポーツは苦しくてもやり抜くものであり途中で投げ出してしまう者は敗者である、と生徒たちに教えているようである。部活動を楽しみからという理由で参加し続けている生徒はどのくらいいるのだろうか。やめたくてもやめられない状況で踏ん張っている生徒はどのくらいいるのだろうか。

そして、何よりも問題とされていることが、自主的であるはずの部活動が強制されている現実である。部活動は本来、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる」ものであり、教育課程には含まれていない。<sup>[9]</sup>それは、教育課程外・学校教育内で図1のような「グレーゾーン」と呼ばれる曖昧な位置に位置づいている。<sup>[10]</sup>

教育課程内 学校教育内	教育課程外 学校教育内	教育課程外 学校教育外
・授業 ・学校行事 ・学級活動	・部活動 ・補修 <b>グレーゾーン</b>	・スポーツクラブ ・習い事

図1：部活動の位置づけ

(出典：『ブラック部活動』<sup>[10]</sup>をもとに作成)

それにもかかわらず、部活動は、内申点につながるといった様な根拠のない言葉によって強制化されてしまっている。内申点につながっているかどうかは、生徒自身やその保護者にはわからないことである。つまり、「見える化」されていないため、信じて疑わずに部活動に取り組んでいる状態だ。その結果生徒は、やめたくてもやめられないマインドコントロールに陥っている。平成29年度にスポーツ庁が行った『運動部活動等に関する実態調査』によれば、約3割の公立中学校が全員入部制をとっている。<sup>[11]</sup>3割と聞けばあまり多くないと考えられるだろう。しかし、部活動は自主的・自発的に行われるものである。つまり、全員入部制は0%でなければならぬ。

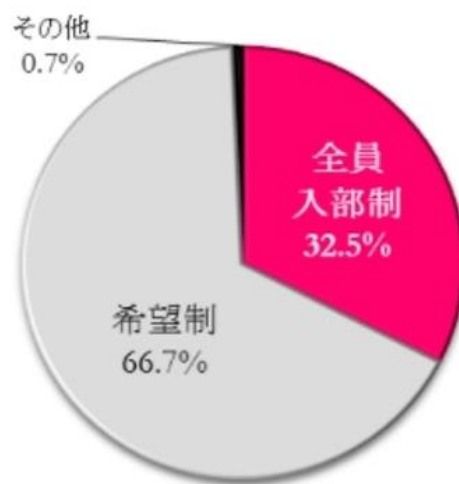


図2：スポーツ庁 公立中学校における部活動加入の方法

(出典：平成29年度『運動部活動等に関する実態調査』をもとに筆者が作図 <https://blogos.com/article/269760>)

強制されているのは、生徒だけではない。教員もまた全員顧問制といった様に強制されてしまっている。平成29年度にスポーツ庁が行った『全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』によれば、約9割もの中学校が全員顧問制をとっている。<sup>[11]</sup>

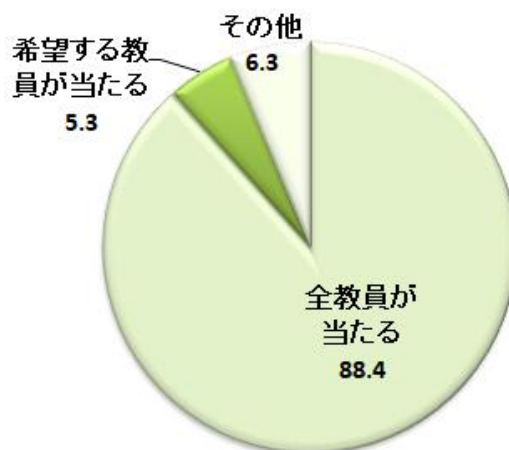


図3：スポーツ庁 全員顧問制をとっている中学校の割合

(出典：『平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』の156頁の数値をもとに筆者が作図

<https://news.yahoo.co.jp/byline/ryouchida/20180401-00083410/>)

全員顧問制が拡大した背景には、教員の多忙化や生徒の安全面強化そして部活動の過熱が挙げられる。<sup>[12]</sup>また、全員顧問制の問題点は教員の多忙化を引き起こしているだけではない。

い。全員顧問制によって教員は経験したことのない部活動の顧問を任されるケースが発生している。<sup>[13]</sup>経験のない部活動を顧問するという事は、事故の発生リスクが高まるということだ。2017年栃木県那須町で登山講習中だった大田原高山岳部の8名が犠牲になった事故。犠牲者うちの1名は登山初心者の山岳部顧問であった。「向いていない」と両親にも話していたといわれている。<sup>[14]</sup>

また、部活動問題は教員や生徒だけの問題ではなく、保護者や地域住民などからの圧力も問題視されている。部活動を強制的に考えているのは保護者もまた同じなのである。子どもの成長を願う気持ちや学校生活を充実してほしいという思いから、部活動には参加するべきだと考える保護者も少なくないだろう。子どもが自主的・自発的に参加しない部活動で学校生活を充実させることはできるのだろうか。保護者のそういった期待がより生徒をやめたくてもやめられないマインドコントロールへと導いているのではないだろうか。地域住民からの圧力を最も感じる出来事が、高校野球の夏の甲子園である。地球温暖化現象により夏の気温はますます上昇傾向にある。部活動中に熱中症に陥る生徒も増加している。熱中症の危険性から甲子園を秋にずらすという案が出た。<sup>[15]</sup>この案に対し、毎年甲子園を楽しみにしている人達から猛反対の声が上がった。夏の暑い時期に甲子園を行うことに「美」を感じているのだ。甲子園と言えば、血と汗と涙という代名詞がよく使用されているが、その血と汗と涙は誰が求めているのか。暑い中熱中症の危険性と闘いながら試合を行うことは誰のためであるのか。観客のためになってしまっていないだろうか。部活動は観客のために行うのではない。何度も繰り返すが、部活動は生徒のためにあるものである。生徒のための部活動が、生徒を事故へと導いている。球児のことを考えているならば、球児の身体への影響を考えてあげてほしい。

このように部活動には様々な問題が生じており、部活動の在り方に疑問や不満を抱えている人が増加しつつある。問題が多いのであれば部活動は廃止する、もしくは外部に委託するなどの案が有効とされているが、本当にそれでいいのだろうか。多くの問題を抱えているからと、生徒から部活動を取り上げてしまう、また、学校では管理しきれないからと外部にすべてを委託してしまう。本当にそれで学校はより良いものになるのだろうか。また、教員の長時間労働の大きな要因

が本当に部活動なのだろうか。私は、生徒に内申のためでもなく、教員や親、地域住民の圧力のためでもなくやりたいという自主的・自発的な感情から部活動に参加するようになってほしい。そして、教員にも部活動の顧問を希望制にしたいうえで意欲的に部活動の顧問を引き受けてほしいと考えている。そこで、教員の多忙化を解消するための別の解決案を考え、部活動を生徒の手に返すためにはどのような対策が必要であるかを検討する。また、教員と生徒の両方にとってより良い部活動とは具体的にどのようなものかを考察する。

### 3. 目的

教員と生徒の両方にとってより良い部活動にするためには今後、どのような部活動を目指すべきなのかを検討する。

### 4. 研究方法

#### 4.1 文献調査

文献調査では、本を読み進めていく中で、教員側の視点と生徒側の視点の2つの視点を持ちながら調査し、一方の視点に偏らないように注意を払った。また、部活動に対して廃止の意思を持つ作者と部活動の存続を訴える作者の両面の文献を読むことで、主観的にならないようにした。部活動の問題点を重く受け止めるためにも、実際に部活中に起こった事件や事故についても調査した。この論文では、文献調査を中心として研究を進めていった。

#### 4.2 事例調査

事例調査では、部活動や教員の働き方に対して現在行われている対策をもとに調査した。ネットを用いて行われている署名活動やSNS等を利用して学校現場での問題を訴えている人などを調べたことによって分かったことや気づいたこと、疑問に思ったことをまとめるようにした。

#### 4.3 アンケート調査

##### 4.3.1 対象者

アンケート調査では、アンケートを作り、それをTwitterやInstagram等のSNSを用いて拡散し、106名のアンケート結果から読み取れることを調査した。今回匿名で行ったために個人の情報は入手できていない。

##### 4.3.2 調査期間

11月25日から12月25日までの1か月間

##### 4.3.3 アンケートの位置づけ

この論文では文献調査を中心に研究を進めた。文献調査を進めるにあたって、その信ぴょう性を確かめるためにアンケ

ートを行うことにした。

#### 4.3.4 調査内容

アンケート調査の内容は、

- ①部活動に入部していたか
- ②部活動に入部したきっかけはどのようなものであったか
- ③部活動に週1日以上の休みは設けられていたか
- ④部活動に週1日以上の休みは必要だと感じるか
- ⑤週に何日の休みが欲しいと感じるか
- ⑥練習量は適切だと感じるか
- ⑦練習の強度は適切だと感じるか
- ⑧部活動に入ってよかったと感じるか
- ⑨部活動は学生生活において重要な役目を果たしていると感じるか
- ⑩どのような点で重要な役目を果たしていると感じるか

の10項目を質問した(以下①、②と省略)。②と⑤と⑩は記述式での回答とし、①と③は「はい」と「いいえ」の2択とした。また、④と⑧と⑨は「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5択とした。⑥と⑦は「多い(強い)」「適切」「少ない(弱い)」の3択とした。記述式の回答は近いものをまとめて集計しデータを求めた。また、⑩では回答がさまざまであったため、キーワードを集計しデータを求めた。以上の10個の質問から、回答者が部活動の練習量や強度をどのように思っていたか、また、部活動の存在意義をどのように考えているかなどを調査した。アンケートの結果から、生徒が適量だと感じる練習量や強度と部活動が生徒に与えている影響を考察し、生徒と教員の両方にとってより良い部活動とはどのようなものかを推定した。

## 5. 結果

### 5.1 文献調査

文献調査を進める中で私が最も強く感じていたことは、本来部活動は自主的・自発的に生徒によって行われるものであるはずだが、なぜ今その部活動を学校や教員が生徒を扱う道具として利用しているのだろうかという疑問であった。どのようにすれば生徒が自主的に部活動に参加し、教員が意欲的に顧問に取り組むことができるのか。

まずは生徒と教員の両方に時間の余裕と心の余裕が必要である。自分のために自由に使える時間の余裕。部活動を心から楽しむことができる心の余裕。長時間の部活動のために時

間に余裕がなくなり、ストレスを解消したりリフレッシュしたりする時間を作ることができなくなっている。また、大会の増加や評価対象になったことで、部活動の過熱化は止まらず勝利主義に陥った結果、心に余裕がなくなってしまう。この状況を改善するためにはまず、長時間練習することが勝つことにつながるといった考えを改めなければならない。短時間でも効率的に取り組むことができれば、上達することはできる。勝つことだけに焦点を当ててはならない。勝つことではなく成長することに焦点を置き換えることができれば、部活動にもゆとりが生まれるのではないだろうか。

また、外部指導者の導入という案もある。<sup>[16]</sup>外部指導者を導入することで、教員の負担の軽減や専門的指導ができるといったメリットが挙げられる。しかし、外部指導者と教員との連携が困難であることや、部活動の過熱化を促進してしまう恐れなどの大きなデメリットも挙げられる。そのため、外部指導者に部活動を完全に委託してしまうことに危機感を覚える。外部指導者をうまく利用するには、外部指導者のメリットだけでなくデメリットをきちんと見つめなおし、そのデメリットをどのように対処していくかを考えたうえで外部指導者を導入すべきだと考える。

### 5.2 事例調査

今回事例調査では、部活問題対策プロジェクトで行われているウェブ署名活動と近畿大学付属高等学校で行われている部活動政策の2つの事例をもとに考察した。

部活問題対策プロジェクトのウェブ署名活動には、「教師に部活の顧問をする・しないの選択権を!」「生徒に部活に入部する・しないの選択権を!」「教師の卵に『部活の顧問できますか?』の質問はしないで!」の3つがある。全員顧問制反対には40,997人が賛同し、全員入部制反対には15,196人が賛同している(2021年01月20日時点)。<sup>[17]</sup>このことからわかることは、部活動の強制に対して不満を抱いている人々がいるという事実である。また、賛同数に注目してみると全員顧問制反対者と全員入部制反対者の数には大きな差がみられる。教員は部活動の顧問をしなくてもよいが、生徒は必ず部活動に入部すべきだと考えている人がいるということだ。繰り返すが、部活動は生徒が自主的・自発的に行うものである。教員に対しても、生徒に対しても部活動を強制することは本来できないことなのである。

次に、近畿大学付属高等学校男子バスケットボール部が行

っている部活動政策を事例に調査した。制度の内容は、日曜日の完全 OFF、1年に10回自分の好きな時に休養日を設けることができるという年休制度、一人1台タブレットを購入させることによる対戦相手の分析である。<sup>[18]</sup>この政策では、タブレットを購入するという金銭的なコストは生じるが、効率的でゆとりのある部活動が実現されている。日曜日を休養日に設けることで生徒も教員も自分の時間を持つことができる。また、それだけでなく1年間に10回の年休制度を取り入れることで、生徒は個人の事情を優先でき、また、周りの生徒も休む生徒に対する反感を抱きにくくなるだろう。私情で休むことに抵抗がある部活動は少なくない。体調不良であっても、休むことにためらいを感じてしまうという経験をした人もいるはずであり、私もそのうちの一人であった。年休制度をとることで、身体とともに心も休めることができるだろう。また、タブレットを配布することで対戦相手を観察することができ、どのような練習方法が適当なのかを分析することができる。生徒たちで対戦相手を分析させ、自分たちにどのような練習が必要なのかを考えさせてこそ、生徒が自主的・自発的に行う部活動といえるだろう。このような政策を行うことで、効率的な練習方法が選択でき、休養も十分なゆとりを持った部活動が展開できる。

### 5.3 アンケート調査

まず①の質問では、90.6%が部活動に入部していたと回答。その入部のきっかけでは、「友人や教師、親からの勧誘」が43.2%と約半数の人を占めている。ほかにも、興味があった、先輩にあこがれてなどの理由があった。4.2%の人は、部活に入らないといけなかったからと回答している。中学校・高等学校では部活動の義務感がまだまだ強く残っている。大学で部活動離脱者が多いのは、この義務感からの解放も大きな理由の一つと言えるだろう。

部活動に週1日以上のお休みはありましたか？  
97件の回答

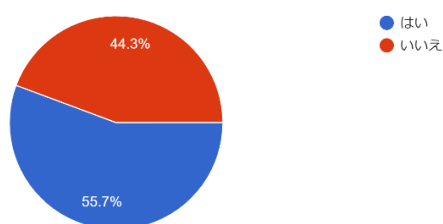


図4：③部活動に週1日以上のお休みはあったか

そして、③の質問では、55.7%が「はい」と答えている。つまり、44.3%の人々は週に1日も部活動の休養日が設けられていなかったのである。週に1日の休養日が設けられず、顧問の予定などに合わせて不定期に休養日がとられていた学校もあるが、休養日は決まった日に設定しておくべきである。

部活動に週1日以上のお休みは必要だと感じますか？  
100件の回答

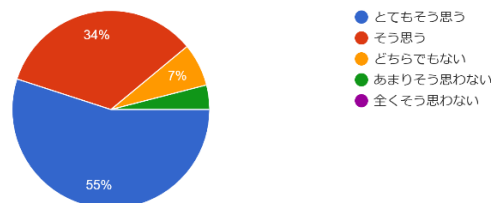


図5：④部活動に週1日以上のお休みは必要だと感じるか

そんな中で、④の質問では、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した人は、全体の89%を占めた。ここから読み取れることは、休養日が欲しいと感じながら毎日部活動に参加させられている生徒が多いということだ。そのような状態で部活動を続けていけば、バーンアウトになってしまう可能性が高くなるだろう。生徒の休養日の需要を把握したうえで、きちんと休養日を設定することが大切である。⑤の質問では、33.3%が週に1日の休養日、51.3%が週に2日の休養日が欲しいと回答した。また14.5%は3日の休養日が欲しいと回答した。記述式の回答であったが0日という回答者は一人もいなかった。

⑥の練習量の質問では、54.6%が「適切だった」と回答するも、41.2%は「多かった」と回答している。ここにもまた、部活動が強制されていることが見えてくる。そして⑦の強度の質問では、49.5%が「適切だった」と回答し、44.3%が「しんどかった」と回答している。部活動に生徒が自主的・自発的に参加するようになるには、もう少し練習したい、もっと難しいことがやりたいと感じさせる必要がある。つまり、生徒に「少なかった」「ゆるかった」と回答させ、生徒が自ら空いた時間を使って自主練習を行う程度が最も理想に近い部活動の在り方なのではないだろうか。部活動の過熱化・長時間化問題は、誰もが経験し得る社会問題である。

部活動に入って良かったと感じますか？  
97件の回答

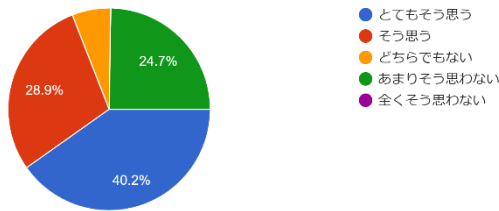


図6：⑧部活動に入ってよかったと感じるか

しかし、⑧では「とてもそう思う」「そう思う」と回答した人は、69.1%に及んでいる。休みがなくしんどかった部活動のはずであるのになぜ、部活動に入ってよかったと感じる人が多いのだろうか。

部活動は学生生活において重要な役目を果たしていると感じますか？  
97件の回答

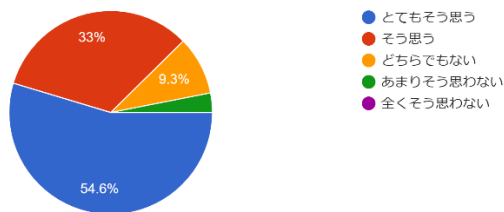


図7：⑨部活動は学生生活で重要な役目を果たしているか

⑨では、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した人が、87.6%もいる。どのような役目を果たしているのかという記入では、キーワードを集計してみると「忍耐力」というキーワードが最も多く、「仲間」や「上下関係」というキーワードがその次に多かった。つまり部活動では仲間を作ることができ、それと同時に上下関係を体感し、社会性を学ぶことができる。部活動には、日常では得ることができないものがあり、存在意義が大いにあるのだ。

しかし、「忍耐力」というキーワードは、しんどい練習にも耐えることができた、きつい指導にもついていくことができた、つらい時も踏ん張る力がついた、そのような回答が多かった。つまり、言い換えると、苦しいのに声を上げずに周りに合わせていた、理不尽にも耐え抜いた、理不尽を受け入れることができた、きつい練習で何とか持ちこたえることができた、とも言っているようだ。これは、鈴木大地さんやエディー・ジョーンズさんが指摘していることではないだろうか。必要ないと指摘されていた理不尽に耐えるや強靱な精神

がまさにこの「忍耐力」であろう。確かに忍耐力は必要である。努力を続けた先に結果はあるだろう。しかし、過熱化・長時間化した部活動では、この「忍耐力」が必要以上に求められてしまっていると考えられる。「忍耐力」が過剰に美化されている。理不尽に耐える力、声を上げないという空気を読む力が部活動によって培われてしまっているのではないだろうか。そのような力は必要ない。理不尽には耐えなくていい、空気を読まず声を上げればいいと誰かが生徒の誤解を解いてあげなければならない。「忍耐力」という言葉は、たかましい大人になるために必要な言葉のようであるが、現在学校にはびこる「忍耐力」は、生徒の個性を押し殺してしまっている。そして⑧の質問で「そう思わない」と回答した24.7%の人の中には、この「忍耐力」という圧力に押しつぶされてしまった人もいないだろうか。人が持つ「忍耐力」には個人差があり、周りと同じ程度の「忍耐力」を求められることに激しい苦痛を感じている人がいるということを教員は再認識する必要がある。求められる「忍耐力」とは、苦しい時に周り支えあって自らの成長へとつなげる力である。そして、この「忍耐力」という問題に学校現場のギャップもみられる。現在、学校の授業ではアクティブ・ラーニングが求められている。生徒は、教員から教え込まれるのではなく自ら学びに向かい、思考し表現する力を育成されている。授業では個性を出し、声を上げることを求められている。部活動では個性を殺し、空気を読むことが求められている。これが学校現場のギャップである。このギャップがある限り、生徒はいつまでも教員の指示に従うだけの存在になってしまうだろう。授業にも部活動にも自主的・自発的に取り組む生徒を育成するためにも、学校現場のギャップの解消を行わなければならない。

## 6. 提案とその効果

以上のことから私は、部活動は生徒が自主的・自発的に参加したいと感じることができるものであり、教員もまた部活動顧問に意欲的に参加し生徒とともに成長できるものが理想であると考えられる。そのためには、意識改革と制度改革の2つの改善が必要とされる。

意識改革では、生徒が「忍耐力」という言葉から苦悩を美化してしまっていることと、学校が部活動を支配してしまっていることから改善すべきだ。生徒に求められるのは「忍耐力」ではなく成長である。生徒にはつらい、苦しいと声を

あげる権利がある。そのことを伝えるためには、生徒が声をあげられる環境を提供してあげなければならない。例えば、定期的に部活動の在り方について顧問と生徒が話し合ったり、生徒の意見を求めたりする。部活動は、生徒のためのものである。生徒のニーズに合った形で行わなければならない。そこで、学校の意識改革も必要となる。現在、学校が生徒を管理するためのものとして部活動が存在している。学校から生徒へ部活動を返すべきであろう。そのためには、部活動の主導権を握るのは顧問だという認識を学校全体で改め、顧問だけでなく学校も部活動に参加する生徒に耳を傾ける必要がある。部活動への参加や部活動顧問を希望制にし、拒否権を与えることで生徒が主体となった部活動を展開できやすくなるだろう。また、部活動や学校の運営に対する意見を募集するために意見箱を学校に設置する。初めは意見を主張する生徒は少ないかもしれないが、意見箱を生徒の見えるところに設置するだけでも生徒は声をあげやすくなるのではないだろうか。生徒が声をあげたいときに声をあげやすくなるためにはどうすればよいのかを考えるべきである。

制度改革では、まず適切な休養日を設定する。週2日は休養日を取り、そのうちの1日は土日のどちらかに設定する。そして近畿大学付属高等学校男子バスケットボール部の政策を参考に年休制度を採り入れる。教員がストレスを発散でき、生徒が休みを必要としたときに柔軟に対応できるシステムを構築する必要があると考えるからだ。また、定期的に生徒とコミュニケーションをとれるようにしておく。例えば、1か月に1度面談を設けることや、部活動ノートを作成するなど。生徒の中には、部活動をただ楽しみたいだけの生徒もいれば、技術を学び実力を伸ばしたい生徒もいるだろう。なるべく生徒の需要にこたえるため、部活動を2部制に分ける。1部では全員参加でなるべく楽しめるメニューで構築する。そして2部では自由参加にし、技術を学びたい者が参加する形にする。2部には外部指導者を招いてより専門的な指導をすることもできるだろう。こうすることでスポーツの楽しさと専門性のどちらも提供することができるだろう。

そして生徒が自主的・自発的に部活動に取り組むために大切なことが、教員と生徒との距離である。教員が指示を出しすぎると生徒の自主性を奪ってしまうこともある。教員はなるべく指示を出さず、生徒同士で考えさせ、共有させる。生徒同士のコミュニケーションを増やすことで、生徒はより自

分たちの部活動という意識が持てるようになるだろう。

そのように生徒が自主的・自発的に部活動に取り組むようになることは、教員にとっても非常にメリットとなる。生徒を客観的に見ることができ、過熱化・長時間化を防止できる。また、専門性を過剰に必要とされることがなくなり教員の負担も軽減されるだろう。生徒が自主的・自発的に部活動を運営し、生徒と教員のどちらにも時間の余裕と心の余裕ができれば、部活動はより良いものとなり、より多くの影響を与えてくれるのではないだろうか。

また、教員の業務の多さも問題であり、業務の分担の促進が必要である。事務員等の人材を増やし、業務を分担することで教員は生徒と向き合う時間や教材研究の時間がより多く作れるだろう。そして、部活動にも意欲的に取り組む教員が増えるだろう。また、オンラインを有効に活用することで業務を簡潔にできるだろう。例えば、研修や会議をオンラインにすることでその場に行く必要がなく、映像にすれば時間の制約も受けない。このように部活動を廃止してまったり外部に完全に委託してしまったりするのではなく、業務を分担したり、業務を簡潔にして教員の業務を減らす方法を施行したい。

## 7. 今後の課題

今後の課題としては、部活動問題は根強いものであり簡単には改善できないということである。部活動問題を扱うには、教員の労働状況や生徒が置かれている環境など様々な背景から考え、改善していく必要がある。提案とその効果で述べたものは理想の部活動に過ぎず、そこに至るまでには様々な制度改革や意識改革が必要である。また、その意識改革は、教員や生徒だけでなく保護者や地域の方々等生徒にかかわるすべての大人も意識改革をしていかなければならない。部活動問題は学校の中だけの問題ではなく、社会問題であるという認識が必要となる。今のままではバーンアウトやスポーツ障害になってしまう生徒が増え、業務内容やその量に対して不満を抱え過労死ラインを超える教員も増える一方である。この根強く複雑な部活動問題を解決するためには、一人一人の意識改革と、少しずつ改善していくステップ・バイ・ステップの変革が必要なのではないだろうか。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた指導教員の中村直人教授に心より感謝いたします。また、アンケートにも

たくさんの方々にご協力いただきました。厚くお礼を申し上げます、心より感謝いたします。

## 引用文献

- [1] 島沢優子『部活動があぶない』講談社出版 2017年06月20日発行, p. 152
- [2] 佐藤博志『ホワイト部活動のすすめ』教育開発研究所出版 2019年05月発行, p. 144
- [3] 中原敦『残業学』光文社出版 2018年12月発行, pp. 118-119
- [4] 野村駿、太田知彩、上地香杜、加藤一晃、内田良「なぜ部活動指導は過熱するのか？—過去の部活動経験との関連から—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第65巻第2号 2018年度, p. 109
- [5] 内田良『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う—』東洋館出版 2017年07月発行, pp. 48-52
- [6] 同上書, p. 148
- [7] 島沢優子 前掲書, pp. 199-201
- [8] 同上書, pp. 190-192
- [9] 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）第1章 総則 第5 学校運営上の留意点, p. 27
- [10] 内田良 前掲書, p. 29
- [11] 同上書, pp. 57-63
- [12] 同上書, pp. 89-92
- [13] 同上書, p. 137
- [14] 那須雪崩事故遺族・被害者の会 2021年01月24日アクセス  
<https://nasu0327.com/>
- [15] いつまで高校球児に美談を求めるのか 2021年01月26日アクセス  
<https://real-sports.jp/page/articles/279194970315817819>
- [16] 島沢優子 前掲書, p. 220
- [17] 部活動問題対策プロジェクト 2021年01月24日アクセス  
<http://bukatsumondai.g2.xrea.com/>
- [18] 近畿大学附属高等学校 男子バスケットボール部 ホームページ 2021年01月25日アクセス  
<http://kinko-basketball-club.com/>

## 主要参考文献

- [1] 島沢優子『部活動があぶない』講談社出版 2017年06月20日発行
- [2] 内田良『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う—』東洋館出版 2017年07月発行
- [3] 長沼豊『部活動の不思議を語り合おう』ひつじ書房出版 2017年08月発行
- [4] 長沼豊『部活動改革2.0』中村堂出版 2018年10月発行
- [5] 中原敦『残業学』光文社出版 2018年12月発行
- [6] 内田良『学校ハラスメント』朝日新聞出版 2019年03月発行
- [7] 佐藤博志『ホワイト部活動のすすめ』教育開発研究所出版 2019年05月発行
- [8] 『教員環境の国際比較：OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2018報告書-学び続ける教員と校長-』国立教育政策研究所 2019年度
- [9] 野村駿、太田知彩、上地香杜、加藤一晃、内田良「なぜ部活動指導は過熱するのか？—過去の部活動経験との関連から—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第65巻第2号 2018年度
- [10] 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）第1章 総則 第5 学校運営上の留意点
- [11] 文部科学省 運動部部活の現状について（平成29年05月） 2021年01月18日アクセス  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/013\\_index/shiryo/\\_icsFiles/afiedfile/2017/08/17/1386194\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2017/08/17/1386194_02.pdf)
- [12] ハングルちゃん 韓国の高校に部活動はありません。 2021年01月18日アクセス  
<https://hanguruchan.com/2019/12/12/121245/>
- [13] 部活動問題対策プロジェクト 2021年01月24日アクセス  
<http://bukatsumondai.g2.xrea.com/>
- [14] 那須雪崩事故遺族・被害者の会 2021年01月24日アクセス  
<https://nasu0327.com/>
- [15] 近畿大学附属高等学校 男子バスケットボール部 ホームページ 2021年01月25日アクセス  
<http://kinko-basketball-club.com/>
- [16] NHK MIRAIMAGINE 変わる部活動 模索する現場から



2021年01月25日アクセス

<https://www.nhk.or.jp/shutoken/miraima/articles/01159.html>

[17] いつまで高校球児に美談を求めるのか 2021年01月26日アクセス

<https://real-sports.jp/page/articles/279194970315817819>